

第一章 戦国動乱と高槻

第一節 応仁の乱と高槻

芥川・入 日本のはとんど全域を一〇〇年間以上にわたって戦乱にまきこんだいわゆる戦国時代は、江戸の去就 仁元（一四六七）年正月、河内守護家畠山氏の内紛を直接の契機として京都で勃発し、五月に畠山義就方に集結した山名持豊（宗全）・斯波義廉らの西軍の挙兵と、畠山政長に組した細川勝元ら東軍の応戦で、本格的な戦乱に突入した。東軍の総帥細川勝元が摂津守護であったため、摂津の武士たちは、直ちに京都の戦乱に参加することとなった。

將軍の居所花の御所を守護するとして細川勝元は、家臣薬師寺兄弟（与一・与次）に摂津武士の一部を割いて加勢させ、その大手の口・北において西軍の太田垣らに対峙させ、芥川氏は三宅・吹田・茨木氏など摂津武士とともに、花の御所の北を東西に走る百々の透から西軍の平賀勢に向かうべく配置した。二十六日の早朝から各所で合戦が開始されたが、太田垣陣に向った摂津衆らの猛攻のため、山名方の一角が崩れ、各所の戦いでは東軍優勢のうちに、二十七日の夕刻まで戦いは続けられ、京都の上京地域は大きな被害をうけて、

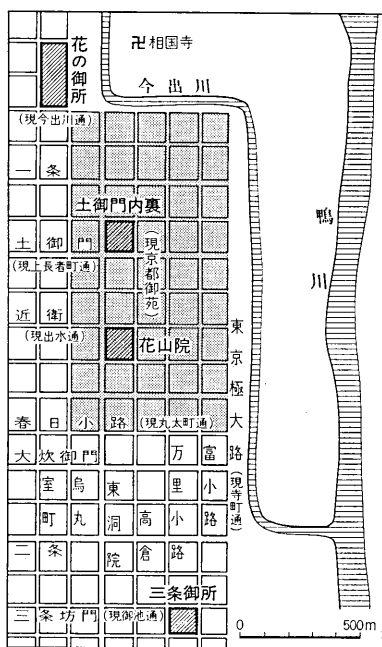


図191 花の御所略図
(『京都の歴史』第3巻による)

われる有様であった。この大内勢の入洛を援けようと、京都から西軍の一部が摂津国に入った。東軍の総帥細川勝元を摂津守護とする摂津の武士たちは、東・西から挟撃されるような局面となり、芥川氏や高槻城にいた入江氏などは、神内山に陣をとって、京都から南下する西軍を阻止する側に立ったようである〔中世二五〕。その総指揮は赤松政則がとったが、池田氏をはじめとして、三宅・伊丹氏らとともに芥川氏も、むしろ大内政弘に降り、あるいは内応して、東軍は摂津の確保を断念せざるをえなかった〔中世二二〕。そして大内勢は二十三日に入京を果すのである。

このように東軍の旗色が悪くなつていったなかで、將軍足利義政は西軍に好意を示しはじめ、弟足利義視よしみは勝元陣から脱走する有様であつた。摂津の武士のなかにはなお東軍に属して、播磨の武士浦上うらがみのりむね則宗らとと

ひとまず緒戦は終つたのである。

一方、京都に近い高槻地方への戦乱の波及も早かった。すなわち、六月中旬に、西軍に加担し支援するために長門・周防・筑前三国の守護職を兼ねていた大内政弘は、本国山口を發った。そして八月三日には摂津国本庄山（現

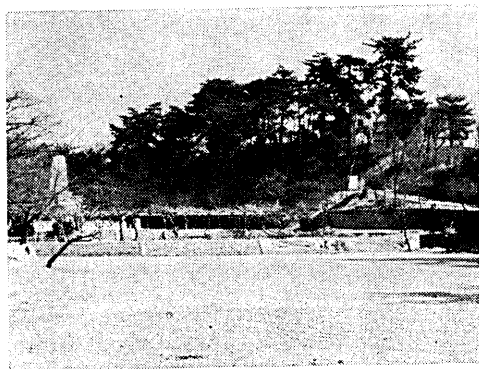
芦屋市内)を、翌四日には越水城(現西宮市内)を攻め、七日には尼崎が焼き払

もに五、六千騎が上洛して、南禅寺裏山の東岩倉山に陣して、九月十八日から約一五日間、西軍の大内勢と激戦を展開し、東山一帯の山容が変わったほどであった。大内勢は兵庫港から京都への補給路確保に不安があった。東軍に組する摂津の武士がいてこれを遮断しようとしたからであったが、一方では反細川方の武士もいて、その補給路はかろうじて保たれていたといっただけでよい。いずれにしても、芥川氏の去就に典型的にみられるように、摂津の武士は分裂し、動揺を繰返したのである。

この間に、実は重要なことがこの高槻市域内で起ったらしい。というのは武士として最上位の地位と実力をもっていた芥川氏がその家の命脈を断たれたと思われるのである。以後、芥川氏が諸合戦に参加した記述はあらわれてこないし、しばらくは芥川城での攻防も展開されないのである。

文明元（一四六九）年の五月から六月にかけて、
安照寺の合戦

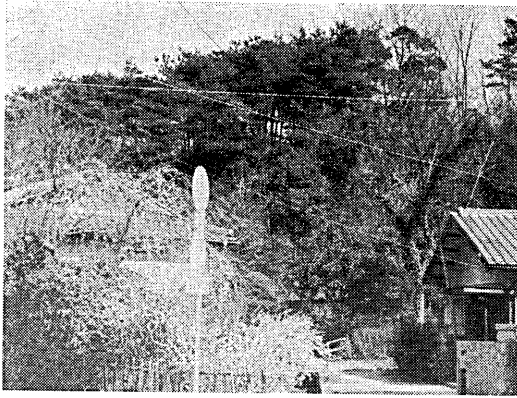
摂津国内では細川勝元の家臣で摂津守護代であった薬師寺与次が、大内勢になびいていた池田氏ほか有力な武士を、ふたたび東軍に復帰させるための工作を続けていた。その中心人物はもちろん池田氏に向けられていたのであるが、それがこの間に成功し、池田充正がふたたび東軍に属したのである。もちろんそれまでに摂津国に近接する山城国乙訓郡では、鶏冠井城や寺戸山（現向日市内）で断続して合戦が続けられていたが、池田氏の東軍帰降に



写168 越水城跡（兵庫県西宮市城山町）

よって、摂津国内にも戦乱がふたたび波及してきた。

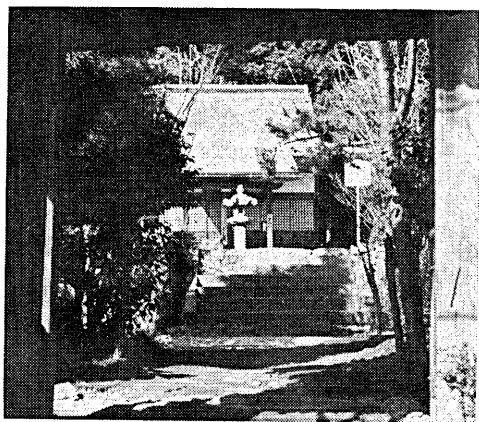
この時期の合戦に東軍の安富民部丞元綱の配下として戦った野田泰忠の軍忠状によれば、六月十六日に西軍が摂津・丹波両国に攻めこんだ時、彼は二十日に安富又次郎（安富元綱の弟か）とともに丹波国余部城で防備にあたっていたが、七月十一日、摂津安照寺に西軍が攻撃をかけて破られたため、薬師寺与次と四宮四郎右衛門尉らがかかえている忍頂寺の城が苦戦しているとの報告をうけて、十三日にかけて忍頂寺の城に入



写169 真上安照寺跡（市内真上町三丁目付近）

って戦功をあげたと記している。安照寺は真上地域にあって丘陵の突端にあり、応急の砦が築かれていたものであると思われる。茨木市内にある忍頂寺は、真言宗高野派勝尾寺の末寺であって貞観年中に僧三澄が創建したものであり、のち高山友祥（右近）がこの地方の大名となった時、キリシタン信仰を普及するため、堂塔を焼きはらい寺領を没収したので、一時難を丹波に避け、本尊（薬師如来）などを移すことがあり、それまでの大塔・講堂・護摩堂・愛染堂・山門・鐘楼・経堂など二三の堂塔を擁した寺観も衰微したという『大阪府史蹟名勝天』。京都もそうであったように、この地方の戦国争乱も、大小の寺院が砦の一部にあてられて、大なり小なり被害をうけたのである。

將軍直屬軍の中核であった西岡被官衆の一人であった先ほど



写170 忍頂寺（茨木市忍頂寺）

の野田泰忠の軍忠状では、この安照寺の合戦の時から、年号を文明元年としている。実は応仁三年が文明元年に改元されたのは四月二十八日のことである。その改元のことを知らずに五月、六月と、摂津・丹波の戦陣にあって、その戦功の一つ一つをメモしていたと思われる。そして改元後約六〇日を経て改元を知るということであって、京都の近隣にいてこの情報の遅延は、東軍としての作戦が、東軍の総帥とかならずしも密接な連絡のもとに展開されていたのではなかったことを推測させるのである。

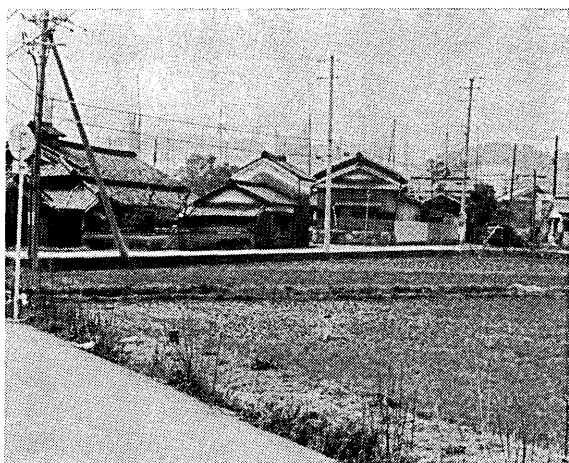
野田泰忠はこの忍頂寺・安照寺近辺での戦いについてはそれ以上のことを記していないが、七月二十六日に東軍に帰順した池田氏の本城池田城は、大内政弘軍の攻撃の前に陥ちたという。そして十月中旬までは大内勢も持ちこたえていたが、十月十六日、山名宗全の子弾正是豊と赤松の大軍のまゑに、兵庫の確保ができず、二十二日、池田城を出たのである〔後鑑〕（卷一百十五）。この頃、野田泰忠は丹波にいたらしいが、十二月十二日になって山名是豊軍に合流して、摂津国の神呪寺山（現西宮市内）・山田荘（現吹田市内）・三宅館（三宅氏の居館で吹田市内にあった）などで合戦。十二月下旬には、西軍が山崎に出陣する報をうけ、山名是豊の軍兵とともに三宅陣営を出て、山崎に駐留し、鳥取尾山に砦を構え越年をしたと思われる。

翌文明二年正月十四日には山崎・鳥取尾山で合戦。二月五日には勝龍寺・植野（ともに現長岡京市内）に出張した西軍と山崎で合戦。四月十四日には勝竜寺城搦手北口で合戦し、馬場・古市（ともに現長岡京市内）に放火し、十六日には西軍の屯する上里・石見（現京都市右京区内）・井内（現長岡京市内）を放火し、向日河原（小畑川の河原か、現在向日市・長岡京市の境界辺を流れる）で合戦。五月四日は淀合戦。五月二十日は茨木合戦。そして十二月二十三日に山名是豊が本国備後に帰国するにあたっては、鳥取尾山城の守衛を命ぜられ、それを果しながら越年。そして翌三年には二月・六月の善峰寺山麓の粟生（ともに現長岡京市内）、七月には勝龍寺合戦に転戦しているという。高槻市域内を東軍と西軍が幾度となくかけ抜ける数カ年が続いたのである。

第二節 守護細川家の内紛

細川政国の 文明五（一四七三）年三月に西軍の総帥山名宗全が没し、同年五月には東軍の総大将細川勝芥川進駐 元も没し、軍兵の対峙も次第に遠のいていったが、大内政弘はなお強硬で、十二月に摂津の大物城（現尼崎市内）などを攻撃していた。翌六年四月、山名の後嗣者政豊が、細川の後嗣者政元と講和し、九月には大内政弘また戈を納め、文明九年十一月、大内政弘・畠山義就らが本国に帰って、応仁・文明の乱も一応終った。

しかし文明十四（一四八二）年になってふたたび戦雲が動きはじめた。南禅寺の僧で相国寺に四度も住したことのある景徐周麟の漢詩文集である『翰林胡蘆集』によると、細川持賢の猶子であった政国が文明十四



写171 大蔵寺跡（市内大蔵司二丁目）

って、その準備のために摂津国に下向することがないわけではなかったが、『晴富宿称記』延徳二年九月五日条）。

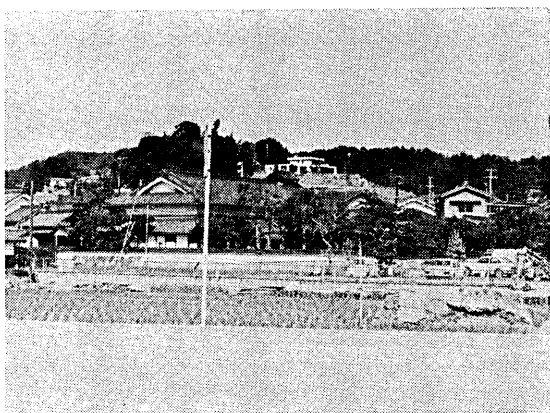
それと時を同じくして、三月八日に摂津守護細川政元は、摂津国内の荘園を再興するためと称して、大山崎の宝寺（宝積寺ともいう。現大阪府島本町）に出陣したが、真の目的とするところは、畠山義就を討つためであり、この出陣は若気のいたりの軽率な行動であるとの噂も流れはしたが、管領畠山政長がこれに加担

年三月に芥川に軍旅を進め、摂州大蔵寺に駐留したが、その号令はきわめて跋扈としていて配下の将兵に妄動はなかったと書いている。著者景徐周麟は政国の陣營を芥川に訪ね、軍旅を解いて帰洛することを説得する力のなかったことを悔んでいるが、他方数日を桜花爛漫のさなかに過したことを述べている〔^{中世}二三八〕。当時、大蔵寺は足利將軍家の祈禱などをも修する名寺であったが〔^{中世}二四〇〕、いまその所在を明らかにしない。服部地区の小字名として「大蔵司」というのがあるが、或いはここに大蔵寺があったのかも知れない。將軍直屬軍内で重きをなしていた細川政国が、何故景徐周麟の慰留をうけるような状態のなかで、芥川への進駐を果たさねばならなかったのであろうか。もちろん細川政国は、細川政元が逍遙のために摂津国に下向するに先だ

し、退^{しり}ぞくわけにはゆかなくなった〔『後鑑』卷二百三十一〕。すでに正月頃から民衆が陣夫として山崎・富田などに徴発されており、その計画は早くから練られていたと思われる〔『中世』三七〕。細川政国の芥川出陣もそれとかかわりをもったものと考えられる。しかしそれは、たんに宗家たる細川政元の出陣に加担してのことだけではなかった。

奈良興福寺大乘院門跡尋尊が噂として耳に入ったこととして記すところによると、細川政元は摂津国吹田荘内の富田に陣をとり（吹田市内に富田という地名はいま見当たらないが、茨木の南西方向の場所と注記してあるので、高槻市域内の富田を誤まり記したものと速断することはできない）、管領畠山政長は茨木に營を整えた。この茨木と富田の南東方面にあった中島は、細川政国の所領であり、管領畠山政長はこの中島に陣營を構えることを要望したが、細川政国は自分の所領であることを理由にこれを拒否したらしいのである〔『中世』三九〕。茨木の南東にあったという中島をどこに当てるかこれまた困難である。もともと噂を記したものであり、その方角などの記載にどれだけの正確さがあるのか、疑問は多いが、將軍直屬軍の旗頭の一人であった細川政国が、摂津国の島上、島下辺のどこかにあった所領を確保する意味もあって、芥川に進駐したと思われる。このことが、細川政元の軽率な出陣に与同したと判断されて景徐周麟の説得となってあらわれたのではないかと推定される。いずれにしても、出陣による陣地の構築は、その陣地になった荘園のみならず、周辺の荘園支配に大なり小なり変化を与えずにはおかないものであった。

文明十七（一四八五）年秋、三聖寺末寺であった宝寺（宝積寺）は、將軍足利義満の寄進以来領有してきたという島上郡真上内の広田・富安名が、公家である伯家（白川家）によって文明十四年から押領されたので、



写172 旧真上村字光徳庵（市内真上町四丁目付近）

恢復をはかるため室町幕府の奉書を出して欲しいと要望している^{〔中世〕}「三四」。文明十四年といえは、細川政元が摂津国内の本所領家の荘園を再興するということを掲げて出陣した年であり、広田・富安名をめぐる問題もまったく無関係ではなからう。当時、伯家は広田社と関係が深く、真上内の広田・富安名の本所分は伯家への上分として若干（伯家の云い分では年間七貫文）が納められ、宝積寺年貢米納入を伯家が約束していたのに、それを反故にしたというのである。

山城嵯峨にあった臨川寺三会院の末寺光徳庵は、真上にあつて、冠庄地頭職が与えられていたものの、足利尊氏が芥河奴可源五基繩に与えてしまったので、この恢復を幕府に訴えている^{〔中世〕}「三四」。広田・富安名に対する宝積寺の主張や冠庄地頭

職に関する光徳庵の云い分は、ともにやばやと幕府から理が認められている。応仁・文明の乱の戦後処理のなかで荘園支配の新たな確認が、事実上は細川政元体制のもとで進められていたのである。

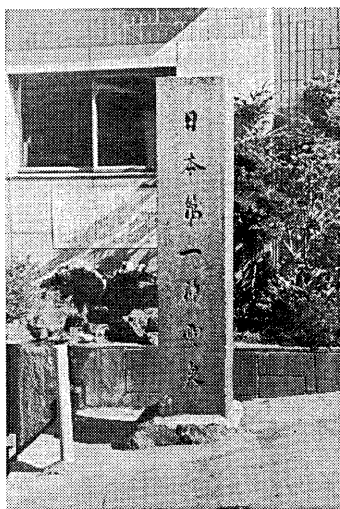
一方、畠山家の内紛はこのようなかで再発した。文明十五（一四八三）年八月、政長と義就が河内で戦い、翌十六年六月には山城宇治で戦い、さらに翌十七年九月には南山城で対峙したが、このことが南山城地域の下級武士（国人）や農民よりなるいわゆる「山城の国一揆」を生む原因となり、この「山城の国一揆」

の要求のまゑに、両畠山軍は南山城から退去せざるをえなかったのである。大和の武士たちもこの対立にまきこまれたが、なによりも河内国の雄畠山家は次第に幕府の中での重さを喪失せざるをえなかった。それに反し、細川家は畿内にその地盤をいよいよ固めたのである。

前將軍足利義政は東山山莊銀閣寺の造営をおこない、文明十七年六月に嵯峨臨川寺三会院において、月翁周鐘を戒師として得度をした。その時、細川政国もまた出家した。法号を道勝という。細川政国が將軍直屬軍内の重鎮であつたこと、とくに足利義政の側近に侍していたことを如実に物語るものであらう〔『後鑑』卷二百五十五〕。

だが、細川政国の政治的行動はこれで終つたのではない。明応二（一四九三）年四月二十二日、細川政元が香厳院殿喝食清晃を將軍に擁立して、將軍足利義材を廃するクーデターを起した時、新將軍に祇候していた武將のうちの一人がこの細川政国であり、政元の謀略を知る腹臣中の腹臣であつたといふことができよう〔『晴富宿』〕。そして明応四（一四九五）年八月、細川氏の内紛を知らずに死んだ。

芥川城と 延徳二（一四九〇）年十二月三日、管領細川政元は京都での政治向きのことは家臣三名のもの能勢頼則のに代行させると云い残し、騎五、六人と従兵百余人をともなつて、狩のためと称して摂州に下つた〔中世二四六・二四七〕。その狩場は茨木であつたといふ〔『晴富宿』〕。そして翌年の正月にわたつて滞在し、芥川近辺に家屋を造営し、莊園を押領し、人夫を徴発して周辺住民に大きな負担を課したのであつた〔中世二四九〕。応仁・文明の乱の緒戦の時期に、東軍細川氏と西軍大内氏との間を、かなり実利を追い打算にゆれ動いた芥川氏本宗がついに滅んで以後、放置されていた摂津国東北部の最大の要地芥川の本格的な再建がここで始められたといつてよからう。そこに配置されたのが、摂津国能勢を本貫としていた能勢頼則であ



写173 有馬温泉湯元(神戸市兵庫区)

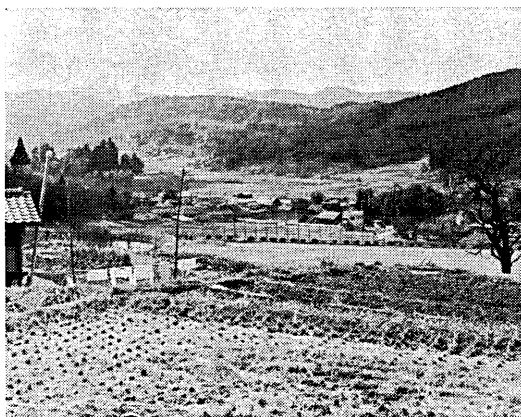
る。受領名を因幡守という。

永正二(一五〇五)年正月中旬、連歌師の柴屋軒宗長が有間温泉に湯治のため下向する途中、芥川城に立ち寄ったことがあった。その機会に、城主能勢頼則が連歌会を興行したのが、芥川城主能勢頼則の初見である〔中世三五〕。しかし能勢頼則が細川政元の側近武將として、また摂津在国の連歌愛好武士として知られているのは、すでに文明十七(一四八五)年三月のこと

である。すなわち細川政元が新住吉において千句興行をした時、能勢源左衛門頼則は、池田若狭守正種・池田民部丞綱正・伊丹兵庫元親らと列らなっており、また長享二(一四八八)年三月、『摂津千句』には、細川政元・河原林正頼・池田正種、肖柏・宗祇・宗長らの席に出席していることなどから知られるのである〔中世四三〕。江戸時代に編纂された系図『寛政重修諸家譜』によれば、頼則のことは頼勝と誤記されているが、頼則は、応仁元年七月、父頼弘が東軍に属して京都近衛油小路で戦死したあとを継いで、一五才にして士卒を従えて武功をあげ、幼名十郎をもじって鬼十郎と称して畏敬され、細川勝元・細川政国から感状数通が与えられた。のち芥川城に移り、兄能勢元頼から家督が譲られ、能勢郡田尻庄も領するようになったという〔中世二八(五参考)〕。肝心の細川政元との関係は記していないが、応仁・文明の乱およびそれ以後の戦乱のなかで、一貫して細川守護・管領家とつながりを持ち続けたことが、能勢氏抬頭の原因であり、政元の時代に芥川城主に転じたこ

とは間違ひなからう。

さて能勢頼則が芥川城主であつた初期の戦乱とは何であつたらうか。細川政元は修験道に執心し妻を迎えなかつた。ために継嗣なく細川宗家断絶をおそれ、明応四年七月、前関白准后九条政基の次男澄之^{すみゆき}を養子とし、將軍出仕をとげた。そして細川政元は丹波国に隠居して進退自由の身にならうと決意していた。その頃、細川政元は摂津・丹波兩國にある莊園全部を請負うことを申請していたが、公家・門跡・寺社滅亡に及



写174 旧能勢村地黄付近（豊能郡能勢町）

ぶとして権門の猛烈な反対をうけ、申請拒否の勅命が細川政国に伝えられたりしていた。これは政元が勅命に応じて断念したため大事にいたらなかつたが、すでに政元は家臣に莊園を支配させていたものもあり、禍根を残したのである

〔請當宿
秘記〕。

このまま細川澄之に家督が継承されれば問題はなかつたが、政元は次第に細川氏一門のなから家督継承者を決定したい気持ちに傾き、文亀三（一五〇三）年五月、阿波細川家から義春の子六郎を後嗣として迎えようとして、摂津守護代であつた薬師寺与一元^{よいちもとかず}を阿波に派遣し、それが決定した。細川六郎は元服して澄元^{すもと}と名乗った。年は澄之と同年で、当時一五才であつた。細川澄之の反撥は大きいし、なお細川政元の態度にあいまいさが残っているうえに、政元の修験道への凝り方はいよいよ

異常となり、ついに家臣の蜂起となった。

永正元（一五〇四）年九月、細川澄元を擁立する摂津守護代薬師寺元一は淀城にたてこもって、主家細川政元に抗した。事前にこの計画を知っていた細川政元は、元一の弟薬師寺与次長忠に淀城を攻撃させた。元一は敗北して捕えられ、のち京都で自殺し、摂津守護代には弟長忠が任ぜられた。この細川宗家の内紛に、能勢頼則がまきこまれなかった筈はないが、どちらに属して動いたのか明らかではない。しかし結果からみて、細川政元―薬師寺長忠体制のもと、永正二年正月の時点で、能勢頼則が芥川城主として坐していたことは明らかである。

芥川氏 細川澄元側は薬師寺元一の敗北によっていささか不利となったが、翌永正三年四月、細川政元の幻影 元が澄元を後継者にするという約束をしたことをうけて、使者を阿波に派遣し、澄元の上洛を促した。二十一日に三好之長・高畠与三が随侍して、千名を超える兵を擁して細川澄元が上洛し、ついで安富宿所に入った。これと入れかわりに細川澄之は石河直経のこもる丹後国加屋城攻撃のため出京し、これと和睦して丹後に在国した。

細川宗家・摂津守護家は細川澄元と三好之長の掌中に帰し、旧来の重臣でありながら疎外されつつあると判断してあわてた薬師寺忠長は、香西元長こうさいもとながと計ってかつての兄元一のときと同様に、細川政元を攻撃し、こんどは遂に細川政元を敗死させたのである。政元は四三才。永正四（一五〇七）年六月のことであった。ここでさらに忠長らは細川澄元・三好之長を攻めて近江に走らせ、七月に、丹波にいた細川澄之がまったく所をかえて、薬師寺忠長らに迎えられて入京。家督相続の將軍御内書が出され決定をみた。

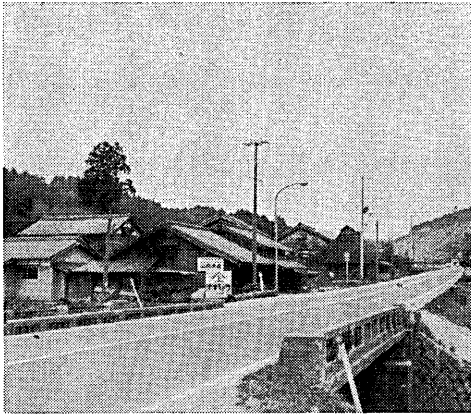


写真175 甲賀山中付近（滋賀県甲賀郡土山町）

しかし翌八月には、細川澄元・三好之長らが甲賀武士山中氏らの支援をえて京都に攻めこんだ。細川高国の加担などもあり、細川澄之・薬師寺長忠・香西元長は敗死し、わずか四〇日間で澄之の夢は消えた。そして摂津国は事実上、細川澄元・三好之長の威を振うところとなったと考えられる。

こんどは能勢頼則が芥川城主として延命する条件はなかった。能勢頼則は芥川をはなれ、恐らくは能勢郡の本拠に退いて変転極まりない政情の移り変わりをみようと決心したものと思われる。そのような空白の芥川の地で動き出したのは、芥川氏の一族中であって能勢頼則が芥川城主の時、屈辱にたえていた無為斎禅柏と薬師寺安芸守某の末子であって芥川家に入りこんだ彦太郎信方であった〔中世二五八〕。永正五年四月にこの兩名は牛飼山の一部を霊松寺へ寄進したが、これは芥川家再興の念がかけられていたものといえよう。しかし実権は三好之長にあって、芥川城主の地位を恢復することはできず、之長の子息である孫四郎長光と又次郎長則が芥川を称しているらしいことから、この二人が（あるいは長光一人だけでも知れない）芥川城主の地位にあって、澄元を擁立することを約しながら、旧来の芥川氏は服属を強いられていたのではないかと思われる。

芥川一族にとって、芥川城主に帰り咲くことは、もはや幻影の時代でしかなかった。

第三節 新しい武士の登場

能勢頼則の 京都における政局の混乱を流浪の地周防国山口で聞いた前將軍足利義材（當時は義尹と改名し、芥川城主復歸していた。のちさらに義種と名乗った）は、大内義興に支援されながら、永正四（一五〇七）年十

一月、東上を計った。翌五年四月、和泉守護家の流れを汲む細川高国は、細川宗家の家督を継承すべきは自分であると主張し、足利義材を擁立して軍を起した。細川澄元・三好之長・足利義澄はあいっいで近江国に逃れた。三好之長に不快の念を懷いていた摂津国の武士のほとんどが細川高国加担にまわったが、そのなかに能勢頼則もいた。

永正六年六月二十日付と思われる細川高国が能勢頼則に与えた感状によると、六月十七日に三好之長軍が京都東山如意嶽に出陣した時、頼則は時刻を移さず、その陣地に馳けむかい、これを攻め落した。この時、家来であった金田十郎・久代与四郎・久代新左衛門尉・下坂亦四郎・瀬見孫次郎らは、あるいは敵を討ちとり、あるいは生け捕りにするなどの戦功をあげたという〔能勢町史 第三卷〕。

三好之長方に誼を通じ、あわよくば芥川家再興を画策していた芥川彦太郎信方は、局面の展開は先ゆき危うしと判断して、永正五年五月、和泉堺に赴き細川高国に帰服しようとしたが、うけいられず、弟とともに堺で討たれたという。芥川信方は薬師寺安芸守某の末子であったといい、名跡のみの継承に近いものであったが、それすら絶たれたといつてよい。芥川豊後守某も、細川澄元派の摂津武士とともに、三好氏の本拠

阿波国に脱出しようとしたが、難風にあつて乗船は沈没して命をたつたという〔中世二五九〕。

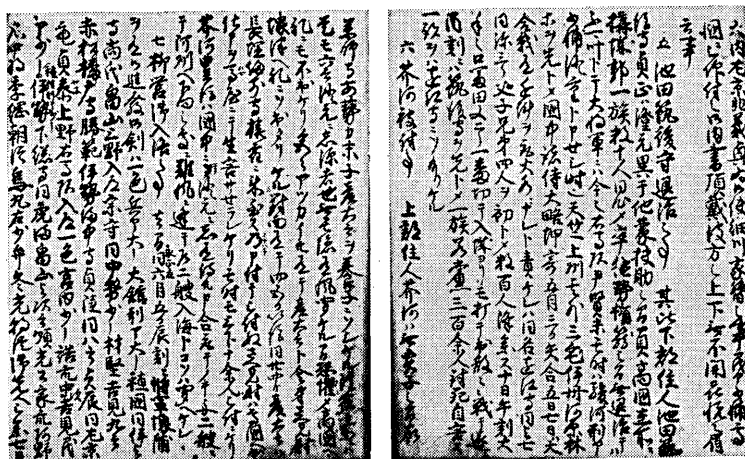
足利義植は細川高国に迎えられて四月下旬に和泉堺津に着き、五月細川高国が細川家督を継ぐことが許され、六月義植入浴して、七月一日に將軍に再任した。まもなく高国は管領に任ぜられたのである〔長江正一〕。同年十一月、能勢頼則は久我家領法久寺代官職の継続を強硬に主張したが、能勢氏の年寄衆らが異見を述べ、代官職辞退が実現したとあり〔中世二六五〕。細川高国の權威を背景として彼が動きはじめたと思われる。だが芥川はなお三好勢力下にあつて、その失地恢復は必らずしも容易ではなかった模様である。

能勢頼則がふたび本格的な動きを記録のうえでみせはじめるのは永正八（一五一二）年七月のことである。すなわち阿波国を出た細川澄元は七月十三日に泉州堺津に上陸して前公方足利義澄方の和泉守護細川政賢と合流して和泉国深井（現堺市内）に進駐した。これを京都で聞いた細川高国は摂津国の將兵を派遣してこれを撃破しようとした。そのなかには高槻の入江氏もいたし、池田・伊丹・三宅・茨木・太田氏などの將兵もいた。

その勢は二万余といわれたが、細川政賢方の七、八千名の猛攻をうけて敗戦を重ねたのである〔中世二六八〕。ちょうどその頃、京都にいた細川高国は大山崎あたりまで出陣する決心をし、先陣として能勢頼則らを派遣する

ことを企て、大山崎惣中のものは結束して忠節を尽すようにと命じている〔中世二六九〕。また勝に乗った細川

政賢軍は摂津國中島まで攻めのぼり、一方淡路守護細川成春軍は兵庫に上陸し、細川高国配下の勇將で能勢頼則の連歌仲間でもある河原林正頼（政頼）のたてこもる芦屋庄の裏手の鷹取城に攻撃をかけようとした。驚いた河原林は高国に救援を依頼した。高国は馬廻衆であった柳本宗雄とその子波多野孫左衛門・荒木大蔵少輔ら武將三十数名に二、三千の兵を付して急派したが、実はそのなかに因幡守能勢頼則がいたのである。



写176 不問物語〔部分〕(前田尊経閣文庫所蔵本)

この馬廻衆は七月二十六日の芦屋原の合戦ではまず勝利したが、播磨守護赤松義村が出陣してきて鷹取城を攻撃し、ついに八月十日に陥ちた。赤松軍はさらに進んで伊丹城を攻めた。京都への進攻は旬日に迫っていた。高国方の摂津武士勢は総敗北であった。高国は將軍義尹をともなつて丹波国にのがれた〔中世七〇〕。

この戦いのなかで、細川尹賢に大内義興勢が加勢して、高国軍の形勢を逆転しようとして山崎まで馳せ下った時、高槻を本拠とする入江氏が近隣の一揆を催して山崎に攻め寄せる動きがあるとき、山崎の陣をひきはらったという〔中世七二〕。これは八月十四日のことであったといい、一カ月前の七月十三日には、高国方の兵として細川政賢と戦かった高槻の入江氏は、一カ月後には高国に矢を引くという動搖を示していることが注目される。

一たん丹波にのがれていた足利義植・細川高国・大内義興らは八月二十四日に二万の大軍を率いて山城に入り、舟岡山の戦いで細川政賢は敗死し、三好之長は阿波に帰国し

た。かくして京・摂津は義植・高国・義興によって秩序が保たれ、しばらくの平和がおとずれたのである〔長江正一〕。
〔三好長慶〕。

この時が能勢頼則の芥川城主復帰の条件すべてが整った時であり、それは永正八年八月末であった。

芥川の春 足利義尹は永正十（一五二二）年十一月に義植

と改名しわが世を謳歌する時代であった。義

植が改名する少し前、京都の日蓮宗寺院本満寺の子院に寄寓していた僧に日順という人がいた。かねてから一寺を建立しようという志をいだいていたが、たまたま摂津国島上郡の上牧村に遊んで、その景勝地であることに心を奪われ滞在を重ねていた時に、一夜の大風で折れた老松の根元に祖塔が発見され、村人たちがこれを奇異として小堂を建立した。時の將軍足利義植はこれ聞き、崇敬のためこの小堂に土地を割いて寄進したが、これが上牧本澄寺であるという。この開山日順上人は永正八年九月十九日に八二才の高齢で死去したが、それ以後、後水尾天皇中宮東福門院和子や公卿烏丸家の欽敬も重なり、上牧村住民あげてみな日蓮宗の信徒になったという〔中世二七二〕。烏丸家が本澄寺を崇敬したというのは上牧村が以前から烏丸家領荘園であった由縁によるものであろう〔中世五五二〕。この上牧は、古くか



写177 本澄寺（市内上牧町二丁目）

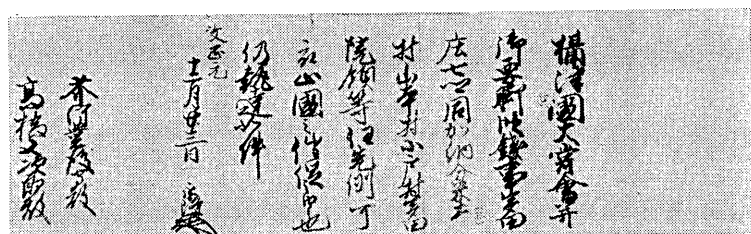
ら神南備かんなびとよばれ、名所として知られ、和歌にも詠ぜられていたという。高槻市域に訪れたしばしの和平ではあるが、それでもなお和平の世を語るにふさわしい話である。

永正十年十二月、摂津国多田庄内（現兵庫県川西市）の一部に課せられていた棟別銭は従前の通り多田院に寄進することになっているから承知するようにとの管領細川高国家臣である中沢秀綱からの命令が、能勢頼則と河原林正頼宛に発せられている〔中世二七五〕。当時、摂津守護はもちろん細川高国が兼ねていたが、摂津国内で棟別銭や反銭などを徴集したり、また免除したりする直接的な責任をもつ統治者は、この両者であったといつてよく、摂津守護代的地位を占めて、まさにわが世の春を謳歌していたのである。

永正十三年の正月を京都で送った連歌師柴屋軒宗長は正月の下旬頃か二月の初めころ、有馬温泉湯治のため、摂津の国を通過した。その途中、芥川の能勢因幡守頼則の新城において、祝いの気持をこめて句をつくっている（写一四二参照）。その宗長の句は、

うちなひき いつこかのころ 春もなし

というもので、高槻市域にひろがる自然界の春のひろがり、住民、とくに芥川新城を築いて君臨する能勢頼則、その人の春とを歌いあげたものといえよう。



写178 室町幕府御教書〔折紙〕（多田院文書—京都大学文学部古文書室影写本）

有馬温泉からの帰路には、芦屋の灘に築かれた河原林正頼の新城にも立ち寄ってやはり句をつくっている。

あさもよひ 昨日の山か うすかすみ

あわち山 春やおしま 朝かすみ

という句である。摂津守護細川高国体制のもとで、芥川と芦屋の浜に新城が築かれたものと思われるが、西国街道の東と西にあたり、ここが摂津守護所であって、その城主が守護代であったとみてよからう。

宗長はその帰路ふたび芥川城に立ち寄り、千句興行をおこなっているが、その時の宗長の句は

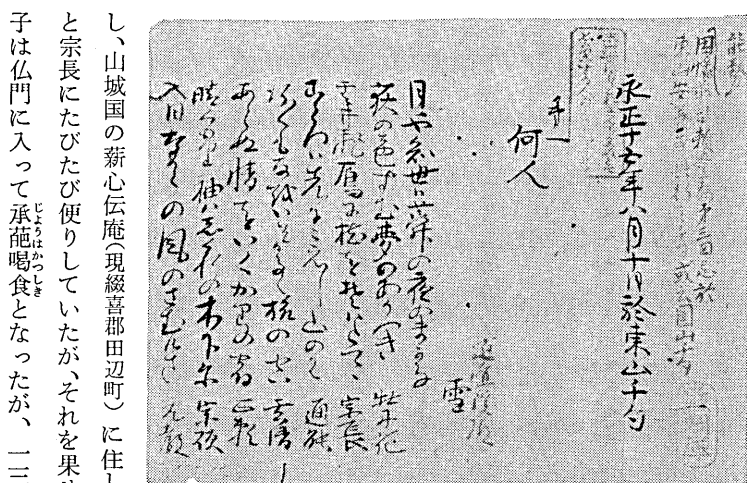
桜さく 春かせかほる 柳かな

陰暦二月下旬の頃と思われ、桜花爛漫たる芥川城周辺の光景が目あたりに見えるようである〔中世二八〇〕。

しかし能勢頼則はこの永正十三年八月、栄光のうちに死んだ。頼則のあとをついで芥川城主となったのは源左衛門尉頼明であつたらしい〔中世二八五及びその参考〕。同年十二月二十六日、細川高国は摂津国水無瀬庄は先例通り、段銭・臨時課役・守護人夫役などを免除するから、そのために使者の入部することを停止せよと命じているが、その宛名は薬師寺与一であり、彼が守護代の地位を嗣いだと思われる。能勢頼則生存中であれば当然彼に宛てられるであらうし、子息頼明は守護代の地位を継承しなかつたと思われる〔中世二八二〕。

円山千句 永正十五（一五一八）年八月十日から三日間、京都東山円山安養寺において、能勢頼則（生前には頼豊ともいっていたらしい）第三回忌辰を迎えるにあたって、供養のための連歌会が興

行された。世にこれを「東山千句」「安養寺千句」「円山千句」などといい、きわめて連歌史上著名なものである。三条西実隆は自著「再昌草」のなかで、自分も知己であつたが、柴屋軒宗長にとってはとくに親交深



写179 円山千句写本（大阪天満宮文書）

かっただけに惜別も断ちがたく、この千句を発案したことを述べている。またこれが三界出離の因縁となり、頼則在世の時の数奇にこたえて、幽魂が納受されること疑いなしと記している。そして三条西実隆は発句に

月やしる 世は葬の 夜のまかな

と詠じている。その席に連なったのは、主催者宗長はもとより牡丹花肖柏・宗碩などの連歌師のほか、細川高国麾下の武将で能勢とともに戦陣をはせた間柄であった河原林正頼・寺町三郎左衛門・波々伯部正盛などである〔中世三四〕。そして宗長は千句の第十に主催者としての句
月にあはれ あらましかはも 夢路かな

と愛惜の情をのべている。

宗長と能勢家との関係はそれのみにとどまらない。能勢頼則夫人は、頼則の死後得度出家して慈香禅尼と称し、山城国の薪心伝庵（現綴喜郡田辺町）に住していた。その慈香禅尼は宗長の実子をおうように死去したらしい。宗長の実子は仏門に入って承葩喝食（じょうはかつしき）となったが、一三才になった時、慈香禅尼の手紙を貼り継いで長巻にし、その



写180 酬恩庵〔薪心伝庵〕（京都府綴喜郡田辺町）

が
あ
ろ
う。

細川高国と
芥川城強化

永正十六年になって政情は動きはじめた。細川高国と細川澄元の対立が激化し、大内義興も本国にひきあげた翌十七年春になって、三好之長は大兵を擁して権勢をほしいままにし、細川澄元は伊丹庄に移って、摂津国から京都まで軍兵で埋まったといわれたほどである。近江に逃れた細川高国は近江守護六角定頼と近江の武士をたのみとして五月に京都に攻めのぼって、三好之長軍をあっけなく破った。

裏に金剛経を書写させ、慈香禅尼ゆかりの心伝庵に納めたのである〔中世三〇〇〕。いわゆる消息経しうせききやうと呼ばれるものである。この心伝庵の庵号は、夫頼則の法名宗心と道号以伝の二つからの一字づつをとって付けたものであろうと思われる〔中世三三三〕。

また宗長は頼則の子息と思われる能勢源左衛門の宿所をおとづれ千句会を興行している〔中世二八五〕。

いづれにしても戦国時代の一武士として、これほど日本文学史上貴重な文献を残す契機となった人も多くはない。細川政元・高国の側近としての政治的地位、たまたま柴屋軒宗長と同時代に生きたというめぐりあわせなどがあったことにもその原因があろうが、西国街道ぞいの芥川城主として住み、摂津武士としてやはり文化的な高さが要求されたということにもその理由



写181 能勢氏過去帳（清普寺文書）

三好之長とその子息で芥川姓を名乗っていた長光と長則らは、一たん降伏し、高国は助命も考えていたらしいが、三好之長のために父細川淡路守尚春を殺された彦四郎は満足せず、手兵をもつて宿所に攻撃を加へ、ために三人は自害し果てた。一方、三好之長の擁立する細川澄元は伊丹庄に在陣していたが、形勢不利とみて播磨國に逃げた。この時堺にいた河原林正頼は早船にて澄元を追跡したが防戦され、ついに追跡を断念せざるをえなかった〔中世二八八・二九五〕。このようななかで、摂津國の武士は高國方と澄元方とに分裂していった。また三好家の血縁につながって、芥川家の延命を計ろうとしていた夢も、ここで最終的に崩れたといつてよからう。

向ったとはいえ、高国は心を許しておらず、四国とくに阿波勢は高国打倒をねらい、摂津席捲をうかがっていた。その防備として河原林正頼の固める摂津国西方海岸の城だけではもとより不充分であったため、その後方の要害として芥川城の強化が必要であった。すなわち河原林正頼は従来の鷹尾城を強化するとともに、西宮の北方にある小山に小清水（越水）城を築いたが「家城」と文献に記されていて、単なる砦ではなく、日



写182 三好之城山〔頂上本丸あと〕(市内大字原)

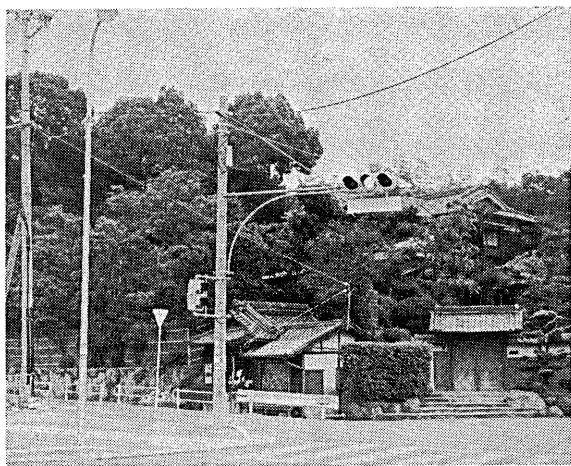
るが、高国が築いたものの規模がどの程度のものであったのかを知る術はない。

大永三(一五二三)年秋、柴屋軒宗長は能勢源五郎が主催する連歌会にのぞみ、
くれてなを のとき年の ひかり哉

の発句をしているが、それがこの城山であったといい、この芥川山城の城主は能勢源五郎であったと思われる

常起居し、またかなり長期の籠城が可能な機能をもつものではなかったかと思われる。それに対して芥川の城は、北方のかんりの高さの山中に城郭を構えるため、昼夜兼行で五〇〇人・三〇〇人の役夫が基礎土木事に駆使されたという〔中世〕。原地区南端に「城山」の小字名としてのこり、また三好山とよばれる海拔一八二メートルの山がそれであろうと思われる。『行囊抄』という古記に、「服部より十町許乾の方に旧塁あり、山城なり」とある。三好長慶が抛ったため三好山とよばれたとも伝えられているように、のち三好長慶が居城としていたものと思われるが、城山として最初に手をつけたのは細川高国であったといっておく。ただ「本丸」「二ノ丸」「追手ヶ谷」「水ノ手」などといわれる地字が残されていて、かつての城郭遺構が偲ばれる。

る〔中世三〇二〕。翌四年四月、三条西実隆は住吉神社・四天王寺・高野山に参詣するため京都を発って、淀川を船で下ったが、鶴殿・三島江ののどかな風景をたのしみ参詣を終え、帰洛の途中五月二日の日暮れ時に芥川に着いた。しかし能勢源五郎の城山を訪れてはおらず、芥川の善住寺という寺に宿した〔中世三〇四〕。この善住寺はいま残っていないが、善住寺は禅宗寺院で諸山の寺格で、京都安国寺僧鐘谷利聞が開山である〔扶桑五〕。応永頃の創建であろうかといわれている。芥川地区内の小字に「善成」というのがある（現在の第一製薬工場敷地の西部と大日本セロハン敷地の東部の接したあたりである）。ここに善住寺があったのであろうか。能勢源五郎が旧来の西国街道ぞいの芥川城にいたのであれば、当然ここに立ち寄った筈であろう。それが訪れていないことは、能勢源五郎の芥川山城が街道から遠く離れていて不便であったことによるのではなからうか。大永五（一五二五）年五月十二日に芥川山城城主能勢源五郎国頼は芥川牛飼山の一部を霊松寺の山林として寄進した〔中世三〇九〕。霊松寺はいよいよ武士との結びつきを強め、寺境・寺領を拡大していた。



写183 能勢氏寄進の牛飼山（市内天神町二丁目）

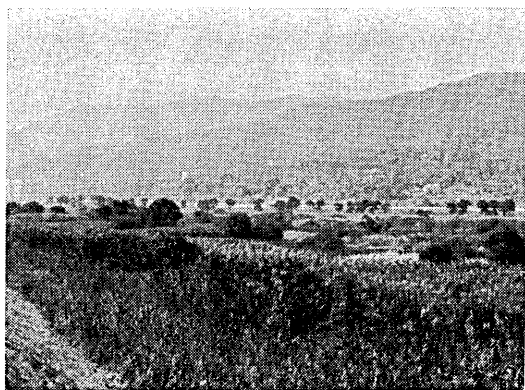
動乱の再発

永正末年から大永五年頃にかけて、細川高国の中央政界での専横はしだいに募っていたが、高槻市域の小世界は、能勢国頼の支配下にあつて、比較的平穏な日を送られていた。

しかし大永六（一五二〇）年七月、細川高国の支柱であつた香西元盛と細川尹賢ただかたとが不和となり、細川尹賢が香西元盛に叛心ありと高国に讒言そんげんしたため、高国は香西元盛を謀殺した〔細川両家記〕。香西元盛の兄弟であつた波多野備前守種道・柳本弾正賢治これをうらみ、丹波国に下つて挙兵を企てた。十一月細川尹賢を大將とし、高国の馬廻衆を中心とした将兵が丹波に進攻した。その中に能勢国頼がいたかどうか明らかではない。しかしこの細川尹賢軍は大敗を喫し、高国支配体制は根底からゆさぶられることになった。

摂津国では、高国支配に耐えていた細川澄元の残党三宅氏・吹田氏らが中島で蜂起し、高国は伊丹氏と連携をとりこれを吹田に攻撃して、十二月十一日合戦がおこなわれた。伊丹氏配下の森本氏などが戦功をあげているが、能勢氏もこれに参加したのではなからうか。播磨にのがれそれから阿波に帰つたまま恨みを抱いてそこで死んだ細川澄元の子晴元、また自害した祖父三好之長の復讐心を秘めた三好元長らが打倒高国の軍旅をおこし、堺に上陸し摂津中島に布陣した。

こえて大永七年二月、丹波国から柳本軍出でて、高国麾下の薬師寺兄弟が固めていた山崎城（現京都府大山崎町）を攻め落し、兄備後守国盛（三郎左衛門尉）は高槻入江城に逃げこみ、弟与二は一度とらえられたが、高国陣に送りがえされた。東の山崎城陥落の報と、西の吹田における細川晴元・三好元長軍強大との報との間にあつて、摂津島上・島下両郡にあつた芥川城・茨木城・安威城・福井城・三宅城の諸城主は、囲まれて攻撃されない先に城を出て離散したといふ〔中世三三三〕。高国が実力にものをいわせて鋭意築きあげ

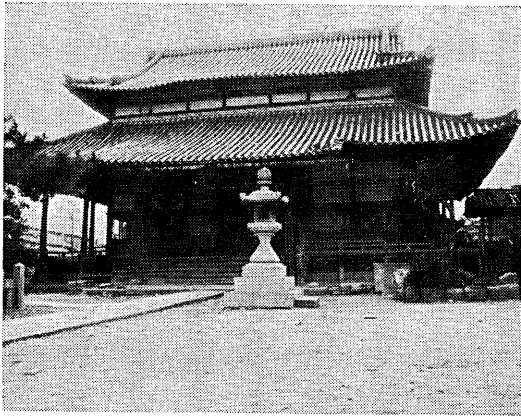


写184 大山崎遠景（対岸八幡町より）

た芥川山城もまことにもろく、能勢氏の高槻の歴史からの退場も実にあつけないものであつた。高国は近江に逃れて以後、さらに波乱を経ながら、享祿四（一五三二）年六月八日、三好元長らの軍と摂津天王寺で戦つて敗れ、敗走の途中、尼崎の紺屋の壺のなかにかくれていたが、ついに発見され、無惨な姿で自刃し果てた。

細川家の内紛はいよいよ昏迷をふかめた。短命でそれだけに専制的で高圧的な畿内政権が登場したが、それはかつての河内守護家畠山氏が先例として示していたように、細川家全体の後退の兆候でもあつた。

大永七年二月、柳本との合戦に破れて入江氏の拠る高槻城に入つた薬師寺備後守国盛は、周辺の諸城が次々と抵抗することもなく高国の戦線から離脱し、開城して離散する情況下においては、高槻城でふみとどまるわけにはゆかなかつた。入江氏と芥川氏の残党と思われる芥川中務丞とともに、薬師寺はまもなく高槻を離れたものと思われる。しかしその離城は高国方にふたたび結集するためのものではなく、むしろそれに敵対していた細川晴元方への帰参であつたように思われる。というのは、享祿三（一五三〇）年八月、細川高国（当時常恒と号していた）が、伊勢・近江・越前・出雲・備前と流浪のすえ諸国の牢人（らうじん）を結集して播磨国に攻め入つた時、薬師



写185 富田教行寺（市内富田町六丁目）

寺国盛は晴元方武将として高島城の守衛に当たっていたことから明らかである。この戦いは、九月、十月と続けられるが、十一月になって薬師寺国盛は大物浦（現尼崎市内）の戦線を放棄し、細川高国方に寝返ったのである。そのため細川晴元の堺屋形に入質として預けられていた子息は殺された〔細川両〕。

大永七年以後、薬師寺国盛と行動をともしたのではないかと思われる入江氏がふたたび現われるのは享祿四年五月のことである。將軍足利義晴を擁立する近江衆が京都に進攻した時、芥川中務丞と入江藤四郎は

摂津に入ろうとして山城西岡衆に款を通じた。將軍衆以下の敵勢が西岡衆を抱きこもうとしている動きがあるだけに、この申し入れは西岡衆にも歓迎されたく、京都と摂津間の道路を守衛し、反義晴軍の行動を塞ぐために配置されたと思われる。この芥川・入江両氏に対する西岡衆の対処は、閏五月に晴元軍の総帥三好元長に報告されている〔中世三一〇〕。それまで山崎警固にあたっていた池田筑後守が、西方から高国軍が攻め上ってきたのを防ぐため本貫の池田城を固める必要があったて戦線を離脱せざるをえなかったの〔細川両〕、入江氏などの申し出は時宜をえたものだった。これによって、筑後守は早速本貫地に帰って守衛態勢を固めたものと思われる。結局は薬師寺国盛の場合と同様な行動であったが、同年六月八

日細川高国が尼崎で自刃する日の直前に、細川高国配下の武将細川尹賢は富田寺（富田道場であろうか）に退き、そこで合戦があり、千人ばかりが戦死したという〔中世三一九〕。この時、入江・芥川両氏は晴元方、すなわち細川尹賢をここまで追いこんだ木沢長政の側に立っていたものと思われる。細川尹賢はなお富田あたりで約五〇日間ばかりを持ちこたえたが、ついに七月二十四日に木沢軍に追いこめられ、河内国枚方において自殺したという〔中世三三〇〕。

高槻地方の戦国時代は、むしろこの頃になって熾烈に、そして凄惨に戦われていたのである。

第四節 富田の一向宗

蓮如の 越前吉崎御坊にいた蓮如は、外には守護富樫家や武士の圧迫をうけ、内には蓮崇の野望のま
富田留錫 えに教団の結束がみだれることをおそれ、文明七（一四七五）年八月に吉崎を退去した。海

路をとって若狭小浜に上陸した蓮如は、丹波路を通じて摂津に入った。はじめ有馬郡名塩（現兵庫県西宮市）
におり、それから高槻市域内の富田に駐錫し、さらに河内国出口（現枚方市内）に遷って光善寺を創建したと
いう〔中世二一六〕。枚方出口の光善寺は、この近所の九間在家に住んでいた光善が喜捨して建立したものであった
から、その名にちなんで寺号が決められたのであったが、蓮如はこの光善寺を順如に相続しているところか
ら、本願寺教団のなかでもそうとう重視された寺院であったと考えられている〔『本願寺史』一巻〕。これにひきつづ
いて富田にも道場が建てられた。この道場に安置する予定であった宗祖御影（蓮坐像）に、文明八年十月

二十九日の日付と「摂州島上郡富田常住也」の奥書があるところから、富田道場は文明八年十月頃に創建されたものと考えられる。ただこの宗祖御影はのちに紀伊国阿間あま（海部）郡の清水道場（現和歌山県有田郡清水町）の本尊と定められてしまい、富田道場に相承はされなかった〔中世二一八〕。そしてこの御影は現在鷺森別院（現和歌山市内）の所蔵となっている。何故そのようなことになったのか、また富田道場の手から離れたのは何時かということは一切明らかではない。

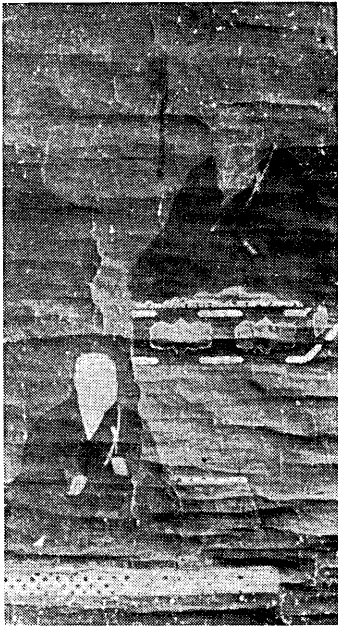
この富田道場は、蓮如の子蓮芸ねんげいによって本格的な寺院となった。永禄三（一五六〇）年には勅許をうけ、本願寺の隠家寺の一つとなり、親鸞の著わした「教行信証」を蓮如がこの地で書写したことに因んで教行寺と称するようになったと伝えられている〔摂津名所図会』和漢三才図会〕。

蓮如は富田道場・光善寺に居住していた時、文明八年の正月を迎え、年六二となった。年頭にあって父

であつた存如の年齢にまで達した感慨を和歌に托している。

たちちをと 同年まで いける身も あけ
ぬる春も はじめなりけり

さらに文明八年六月二日付の御文章のなかでは、父存如の正忌辰が六月十八日であると述べ、自分も「十八日まで存命あらんこそ」と述べ、父と同じ年月の命



写186 宗祖御影【上・親鸞，下・蓮如】
（和歌山市・本願寺鷺森別院所蔵）

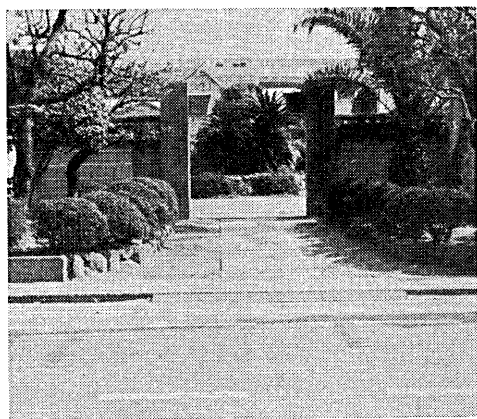
をながらえたいと願っている〔帖外御文章〕^{〔章〕四四}。もちろん蓮如はさらにその後の二〇余年を生き、八五歳で天寿を全うするのである。

蓮如はその後、畿内の各地に布教してまわったが、文明十年正月下旬に、山城国山科の地に移り住むことになった。これは山科に本願寺を再建するためであった〔本願寺史〕^{〔史〕一}卷。もちろん蓮如はそれ以後も、各地を廻って教えを説いた。明応四（一四九五）年十一月十九日には富田から上洛したとあるから、その頃にも富田辺で布教していたのであろう〔拾遺蓮如上人〕^{〔御一代記聞書〕}。

初期の一向宗 蓮如は先師存如の正忌辰を前にしてさきの御文章を認めた六月二日をすぎ、無事正忌辰を信徒の動向 すまし、五五日後の七月二十七日にまた御文章を認めている。それによると、摂津・河

内・大和・和泉の四カ国で、聖道禅僧など他宗の人びとで当流の門徒となるものがでたと記している〔帖外御文章〕^{〔章〕四五}。蓮如の父存如につねに随侍していた式部卿正信房が開基である本照寺は、いまは富田にあるが、もと高槻にあつて光照寺と称していたという。この本照寺にも蓮如の「御文章」が所蔵されている。その御文章では、富田庄内の男女老少に、一切の諸仏は神となつて示現して、衆生と縁を結び、なんとしても大衆を仏道にひきいれ、浄土極楽に往生させようとしているのだと、いわゆる「和光同塵」を説いている〔中世〕^{〔中世〕一五〇}。蓮如のこのような御文章による僧侶・信者への布教が、浄土真宗が流布していった一つの原因となっている。

蓮如がしばし滞在していた富田庄の住人たちが、やはりこの地域の中心的な信徒となつていたと考えられるが、次第にその周辺にも流布していった。その一人に郡家の主計^{かづえ}という人があつて、いつも念仏をとなえていたため、鬚^{ひげ}を剃る時にも念仏をとなえることに心を奪われ、ついつい鬚を剃っていることを忘れて、顔



写187 堺頭本寺（堺市宿院町東四丁目）

を切らぬことがなかったという。主計というその名からしてかなり上層の住民であったと思われる〔中世五二〕。富田を中心とした一向宗信徒が政治的にも大きく注目されるにいたったのは天文元（一五三二）年秋のことで、蓮如が駐錫（ちゆうしやく）してから約半世紀を過ぎた頃である。しかしそれは富田地域の信徒たち自からが招いたというより、すでにのべたように、享禄四（一五三二）年六月、細川高国配下の将細川尹賢が木沢長政に追いこまれて富田に入り、富田寺に避難し、最終の抵抗を試みたことと関係があることであって、いやおうなしに他から戦国の争乱にまきこまれたのである。

富田道場の細川晴元の陣営を一つの中心となって支えてき
 焼き打ち た三好之長は、讒言により晴元から不興をかつ
 ていたが、天文元（一五三二）年六月二十日に、細川晴元を支
 援するため本願寺証如が動員した摂・河・泉三国の一向宗信徒
 の攻撃をうけ、堺の日蓮宗寺院頭本寺で一族・家臣ら八〇余名
 とともに敗死した。その先日に長子千熊丸（のちの三好長慶）と妻
 は阿波国に脱出している〔長江正一〕。しかしそれから四〇日
 余しか経ない八月初旬には、細川晴元と一向宗信徒の一揆勢と
 の間に対立が生じ、摂津浅香道場や和泉堺で攻防が展開される
 ことになる。さらに本願寺勢力とかねてから対立していた京都
 の日蓮宗勢力は、日蓮宗の信者であって有力な外護者であった

三好元長が一向一揆に攻め殺されたということに対する復讐の意味もあって、一向一揆討伐軍に参加するにいたった。これが奈良・京都に波及し、高槻市域に飛び火したのは十一月のことである。

十二月二十三日、摂津島上郡内の武士たちが結束して、富田道場をはじめ一向宗信徒の家々を残らず焼きはらっていった。この一向宗信徒を掃蕩しようとする島上郡武士らの軍事行動は、かなり計画的なものであったらしく、同じ日に島下郡内の武士である池田衆や伊丹衆らが、同郡内にあるすべての一向宗道場に放火している。蓮如の末子であった順興寺実従は、山科本願寺が焼きうちされたため祖像を奉じて大坂に遷座しようとして行けず、宇治田原（現京都府綴喜郡宇治田原町）にいた頃に認めた日記のなかで、富田辺のあわただしい動向を書きとめている〔中世〕
〔三三七〕。

それによると十二月二十一日に河内出口から上番してきた番衆たる信徒を、わざわざ富田に派遣している。しかし翌二十二日、その番衆は富田までゆけなかったとみえて、八幡から引きかえして戻ってきた。それがもたらせた情報によると、京都から日蓮宗らの信徒が二十三日に富田攻撃を実行しようとしているというのであった。それはすでに述べたように事実となったが、それは京都から攻め下つたものだけではなく、富田近隣の武士衆も加わって攻撃されたのであった。実従はこの情報によって、摂津下向延引の態度を決めざるをえなかった。二十三・二十四日両日、実従は近辺の山頂に登り、摂津方向を遠望し、二十四日の日記では、摂津国はいまだ焼けている様子のないことをみて、安堵している。しかしその時には富田道場は焼失していた筈である。しかし実従の耳に一つの噂が入った。それは摂津の一向宗信徒はすべて晴元方に寝返りをうち、富田もみな敵の手に落ちたというものであった。この雑説は正しかったのである。

天文元（一五三三）年十二月の富田道場攻撃は、決してたやすいものではなかった。『足利季世記』は一向一揆を侮蔑しながら次のように記している〔中世〕^{三二六}。

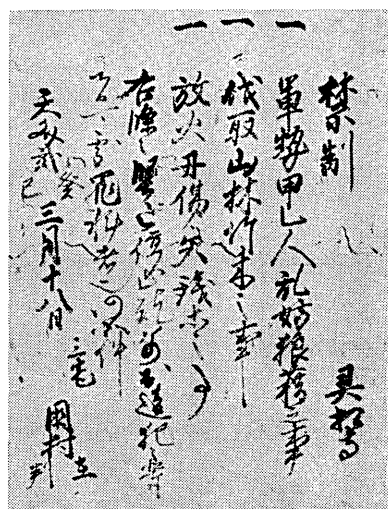
一向宗ノ僧俗一々ニ誅伐ス、然レトモ此門徒学文ト云事ナク、僧俗一向ノ文盲ノ愚人ナレハ、カヤウニ一揆ヲ起シ本願寺上人ノ為ニ味方ト成テ討ルゝ事誠ニ成仏往生ト悦ヒ、弥一揆ヲ起ス事増リケル

すでにふれたように蓮如の「御文章」が一向宗信者の信仰を固め流布する重要な手段となったことから明らかなように、信徒のなかに文字を読み、教義を解する人びとは多かった。もちろん文字を読めない人びともかなりいたことは確かであろうが、そのような人びとにこそ救済があると説いた親鸞の教義は、このように多くの民衆に支持され、そのことのなかに新しい時代の到来があった。

富田攻撃の武將は薬師寺備後守であったが、苦戦であったため、京都日蓮宗本満寺が支援の兵を繰り出して、富田の一向一揆を鎮圧したとして、細川晴元から感状が与えられている〔中世〕^{三二八}。

第五節 細川晴元政権下の高槻地方

細川晴元の 富田の一向宗門徒勢力が圧殺された頃、石山にたてこもった一向宗門徒は、殉教の意気に燃え、堺にいた細川晴元軍を攻め、ついに天文二（一五三三）年二月、細川晴元は淡路島へ脱出せざるをえなかった。このようにして畿内は無政府状態となり混沌とした政情となっていたが、摂津国島上・島下両郡においては、芥川中務丞をはじめ池田・伊丹衆がなお勢力を保って、將軍足利義晴から軍忠を尽せ

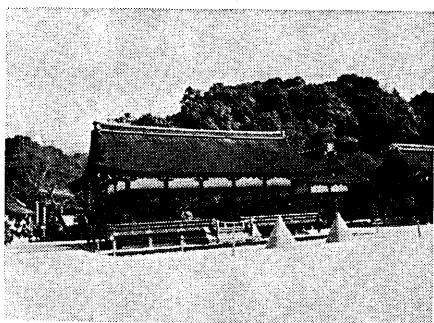


写188 三宅国村軍中禁制案(霊松寺文書)

田城を出て、より京都に近い芥川城へ、有力家臣であった茨木長隆らをとまなつて入城し、中島・石山にこもる一向一揆と対峙しながら、京都への影響を強めたのである〔今谷明『戦国期の室町幕府』〕。かくして芥川城は、当時、最高の実権掌握者たる細川晴元の居城となり、したがってこの政権は芥川政権と呼んでもよいほどである。京都の貴族たちのゆきづまった莊園支配も、この芥川に来て、細川晴元の支援をえなければ解決策が見当たらない事態になった。裁判もここで決定されるようになっていた。

天文二年九月五日、内蔵寮寮頭として皇室領山城国山科東庄大宅郷を支配していた山科言繼ときつぐは、家礼けらいである沢路隼人佐を芥川に下向させ、大宅郷農民の年貢未進をやめさせるための晴元の支援を請うた。早速、晴元の返事が七日付の茨木長隆の奉書としてもたらされた。山科言繼に対しては、山科家の大宅郷に対する支

という御内書が与えられたりしているし〔中世三三九〕、霊松寺は三宅国村の軍中禁制をえて、軍兵の乱入・放火・刃傷から寺をまもり、矢銃とよばれる臨時非常の軍資金調達からまぬがれようとし、あわせて寺領・境内の山林竹木を安全に確保しようとしている〔中世三三〇〕。そして四月にははやくも態勢をたてなおした細川晴元が摂津池田城に入城し、それに呼応して京都の日蓮宗勢力は信徒たる町衆を結集して、いわゆる法華一揆として、摂津に進入した。細川晴元は池



写189 上賀茂神社（京都市北区）

配が全うできるよう支援するということであり、大宅郷の名主百姓と大宅郷を含めた山科全体の七郷の名主沙汰人に対しては、年貢未進とは言語道断ごうだんのことであつて、年貢は厳密に山科家に納入せよという威嚇であつた（三世）。

天文二年十一月、京都上賀茂神社の氏人らが大徳寺僧に売却していた耕地の帰趨をめぐる争論が起きたことがあつた。上賀茂神社側では、氏人の神領売買は非法行為であるからこれを破棄し、あらためて賀茂内の片岡山にある諏訪社に寄進されたものであり、しかも大徳寺僧側では、摂津芥川六郎殿の下知をえて、売得地の所有を合法化していると主張している。この芥川六郎は、細川六郎晴元のことであつて、当時、細川六郎の安堵下知がだされ、それまでの伝統的秩序に少なからず動揺を与えていたことがわかる。一方大徳寺僧側では、一切そのような行為をしたことはなく、ただ買得地は自からの力でまもってきたが、諏訪社がこのような新儀の競望きやうぼうをして、とり返えそうとするのであれば、再度、買得地安堵の下知状をうけたいと朽木植綱に訴えている〔文書〕六。当時朽木植綱は將軍義晴を擁して近江にあり、洛中・洛外の争論を調停する実行力をもっていたとは思われないが、形式的には足利幕府の下知をえようとしている。いずれにしても、京都は当時、動揺し疑心暗鬼がさまざまに生じていたのである。

高槻地域はまさに細川晴元の足下にあつた。晴元が居所としていた城がどこにあつたか、またもちろん城

がどのように普請・造営されたか、一切は明らかでない。住民たちは、晴元足下におかれたために、兵乱の難からは避けることができたにしても、晴元の軍団を日常的に支えるための諸負担は、おそらく老大なものであったと思われる。

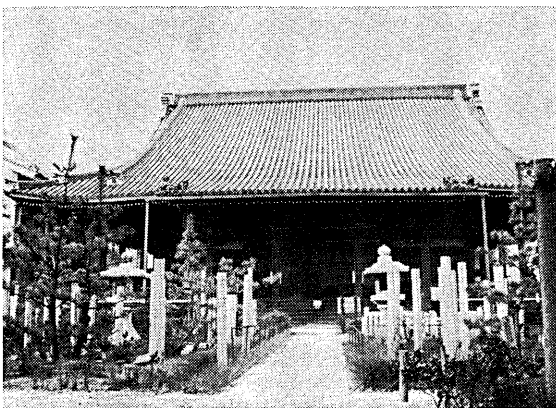
富田教行寺の再興問題 畿内地方の一向宗門徒弾圧のために晴元によって利用された京都の日蓮宗寺院・信徒勢力は、天文五（一五三六）年七月に、山門衆徒・近江六角軍を動員しての茨木長隆らの軍事行

動によって、徹底的に弾圧された。寺院は焼き払われ、信徒が数多く虐殺された。これを天文法華の乱という。この乱が終っても、晴元は残党の追及を止めず、日蓮宗信徒らの集会や往来はもとより、日蓮宗僧侶をやめることも、他宗に改宗することも厳禁され、京都からまったく日蓮宗勢力が追放されたという。このようにして京都から細川晴元勢力に反対しそうな勢力が駆逐されたのち、晴元は芥川城を離れ、京都に入った。九月二十四日のことである。そして彼は將軍義晴に謁して正式に管領となったのである〔今谷明・前掲書〕。

その一カ月たらずの後、十月二十日に細川晴元から富田坊再興を許可するという下知状が本願寺に届けられた。それには木沢長政の添状があって、河内国内の二つの坊も再興を許すが、河内国は細川晴元の分国ではないので、河内国方の手を通して改めて通達するというものであった。かくして、堺坊を加え、四つの坊が再興する運びとなった。もちろんそれまでに、日常的な生活を営み、あわせて信仰のために集う仮の坊舎は建てられていたと思われるから、ここでは公式の認可ということになる。そこで本願寺が期待していたのは、晴元の下知状の文言（もんごん）にみられるような「富田道場」の再興ではなく「教行寺」と寺号を称しての再興であった。そこで本願寺門跡証如は、「教行寺」再興を許可するという下知状に書き改めて欲しいと告げたの

である。このことについての晴元の応対は直ちにはなかったようである。翌年十月二十二日になって、若井というものの懇望によって、こちらの望むような寺号の書きこまれた下知状を重ねて発するよう申請したのである。教行寺再興は富田住民の切なる願いでもあったらしく、閏十月二十四日には、酒・肴など三荷が証如のもとに届けられて、その尽力を乞うた。これがどのような結着をみたのか明らかではない。以後、教行寺と本願寺証如との往来はしげく、漸次寺勢を事実上とりもどしていたものと思われる〔中世三三五〕。

一方、高槻にあった本照寺が富田に移されて光照寺になったというが、その光照寺は、教行寺再興問題が起る以前の天文五年二月二日、まだ晴元が芥川在城中にすでに「富田光照寺」とみえる〔中世三三五〕。このように名前がみえるだけで、寺院が焼きうちを免がれて存続していたとはいえない。教行寺同様焼きうちされたままになっていたものか、高槻にあって焼きうちされないで残っていた坊舎が、晴元芥川在城中に、富田に移築されて、当時、富田の一向宗信徒らにとって貴重な建築のとなつた寺院であつたのか、その辺の事情が明らかでないのは残念である。



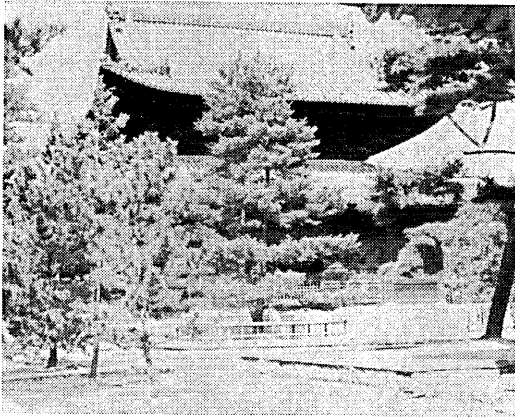
写190 富田本照寺（市内富田町四丁目）

芥川豊後守 細川晴元が芥川城を離れて京都に移ったのち、芥川城にいて高槻近辺の支配に当たっていたのと芥川城主は誰であろうか。そもそも細川晴元政権を支えていたのは摂津国の武士たちであった。管領

細川晴元の腹臣として辣腕を振ったのは、茨木を本拠とした茨木長隆であったし、摂津国内の武士はそれぞれの本拠地に蟠居して支配に当たっていた。その武士としては池田信正・伊丹親興・三宅国盛・芥川豊後守の四人がいる。この芥川豊後守が芥川城主の可能性がある。

天文八（一五三九）年正月十五日、細川晴元が幕府政所執事伊勢貞孝のもとに出仕した時、お供として随侍したのは三好孫二郎（のちの長慶）・長塩と芥川であった（『親後日記』）。三好長慶の父元長が任命されていた幕府御料所の河内十七カ所（現守口市内）の代官職は、元長戦死後、三好政長に任命されていたらしいのであるが、長慶はこれをやめさせ、もとのように元長の子たる自身に改補して欲しいと晴元や幕府に要求した。天文元年のことである。晴元はことわり、幕府は長慶に思いとどまらせようとした。その時將軍義晴は、摂津・河内の諸將に対しても、長慶に思いとどまるよう意見を加えさせたが、その任にあたったのが芥川豊後守であった。そして芥川豊後守のもとへは、三好長慶から「將軍の意見は疎略にしないから、そのようにお伝え下さい」という返事がとどいた。それが天文八年閏八月十五日のことであったが、翌十六日には、その言葉と裏腹に、長慶は摂津島上郡に進み、京都に入ってきたのである（『長江正一』）。すでにのべた摂津国内の晴元配下の四武将のうち、島上郡を本拠としたと想定されるのはその氏の呼称からしても芥川豊後守しかおらず、芥川豊後守と三好長慶はもっとも親近な関係にあったものと想定される。

三好の武威を恐れて細川晴元は高雄に逃れ、將軍義晴は越前朝倉孝景・若狭武田元光・能登畠山義総らに



写191 洛西妙心寺（京都市右京区花園）

出兵を促す一方、近江の六角定頼に命じて、河内十七カ所代官職をめぐって対立激化した三好孫二郎長慶と三好政長との和解を計らせた。七月十四日に妙心寺付近で小競合はあったが、七月二十八日に和談が成功し、三好長慶は山崎から撤退した。そして和平に努力した六角定頼の軍兵が入京した。

そして三好長慶は、八月中旬に曾祖父であった三好之長も在城したことのある摂津の越水城に移るのであるが、それから約一カ月後の九月十三日、六角定頼の武将である近藤・永原が八百の兵を率いて、芥川城請

取のために芥川に來たのである。『親後日記』。「城請取」とは城主改

易などにより城とその領知を接収・没収することを意味するのである。それまでの城主が誰であろうか。これは長江正一氏もいっているように三好長慶以外になかろう。『長江正一』。これは改易接収ではなく、三好長慶の自発的な退城、そして接収という形をとったものであろう。そのようにみると芥川豊後守は芥川城にいたとしても、在地の有力武士として、また細川晴元の腹臣として島上郡の郡代的地位にあり、あわせて芥川城の近世における城代家老的な位置のものとして政治に当たっていたものと考えられる。

それにしても、六角定頼が芥川城を接収して以後の芥川城主は誰で、芥川豊後守はどうなったか。また高槻市域を本質とし

鎌倉時代から活躍を続けてきた芥川氏は、すでにその宗家が絶え、芥川一族衰退に向っていたなかで、それを再興したように思える芥川豊後守はどのような流れをくむ人物であろうか。一切明らかではない。ただ前章の第三節で永正五（一五〇八）年五月、細川澄元派の摂津武士芥川豊後守がいて、三好氏の本国である阿波国に渡海しようとして暴風にあい、乗船が沈没して死去している。この芥川豊後守も素性経歴明らかではないが、その受領名「豊後守」をうけ継いでいるところから、何かつながりがあったのではないかと思われる。

細川晴元の 天文十年となって政情は動くことになった。河内の武士木沢長政は三好長慶・三好政長を芥川城再入部 除こうとして細川晴元と敵対することとなり、晴元は同年十二月八日、木沢討伐のため芥

川城に進駐した。山城国の牢人衆まで出陣し、現地では種々の噂がとび、家財道具や什物などを隠し、疎開するものもでてきた^{〔中世三四〇〕}。奈佐原庄の現地管理にあたっていた荘官も、貴重な記録をこの時に散失してしまった^{〔中世三五九〕}。

木沢長政とは反対に河内守護代遊佐長教は三好長慶の味方をし、翌天文十一年三月十六日、木沢長政は河内太平寺（現柏原市）で戦って敗死した。

晴元は直接戦闘に参加することもなく、また合戦も全面的にひろがることもなく終ったのであった



写192 木沢長政の墓（柏原市安堂）

が、細川晴元は、天文十一年の新春を、臨戦体制下の芥川城で送ったのである。正月七日に晴元は近江坂本に赴いて將軍足利義晴に謁し、十一日に上洛してふたたび芥川城に下った。十四日のことらしい〔三四二〕。

この間に京都の教王護国寺（東寺）では、細川晴元の戦勝祈願をおこなったのであろうか、十二月二十三日にはその巻数^{かんじゆ}が芥川に送られてきているし、また坂本の將軍のもとへも巻数が届けられている。それだけではなく、細川晴元の敵方である木沢長政から要求されていた矢銭（軍資金）の残額も同じ頃に送りとどけている〔三四六〕。本願寺証如も年頭の祝詞と祝儀を芥川の細川晴元に贈るべきであったが、先年の暮から芥川を離れていて遅延したらしく、十五日に富田の本願寺門徒に尋ねたところ十四日に芥川城に入城したとの報告が届けられ、十八日吉日を選んで新年の祝詞を送っている〔三四二〕。

内蔵寮頭山科言繼は三月六日、内蔵寮の芥川率分所支配のことについて後柏原天皇の女房奉書がたことをうけて、晴元に率分（関銭）を未進なく京送するよう協力を求めようとしているし、また言繼自身も晴元に書状を送ってこのことを遵守するよう依頼している〔三四四〕。しかし、案の定、臨戦体制下の芥川であったために内蔵寮率分はおそらく芥川城に没収されたとみえて、率分は天文十年分から天文十三年分まで、まったく山科家には入らなかった。そこで天文十三年四月、細川晴元の下知状をえて、それまで率分未進を続けてきた芥川の薬師寺与一のもとにその下知状が届けられた〔三五六〕。

この芥川率分違乱者が薬師寺与一であったという記述からみて、芥川城を三好長慶が退城し六角定頼が芥川城を接収した天文八年九月以降、薬師寺与一が芥川城主になっていたのではないかと思われる。しかし越水城主であった三好長慶も、晴元在城中は芥川城に詰めることもあったらしい。というのは、天文十一年三

月二十日頃、山科言繼は芥川にいた細川晴元に河内国木沢長政攻めが勝利のうちに落着いたことの祝詞を送ったが、その感謝の晴元書状が、三月二十三日に言繼のもとに届けられた。その時の使者は「筑前」とあり〔中世三七〕、これは三好長慶ではないかという。その年の正月、大山崎の離宮八幡宮に掲げた三好長慶の軍中禁制には、「孫次良」とあるから〔離宮八幡宮文書〕、そののち三月二十日頃までの間に長慶は筑前守にかわったのではないかと考えられている〔長江正三好長慶〕。晴元は山科言繼に書状を書いた三月二十二日の四日後の二十六日に芥川を離れて京都に帰った。

細川晴元三度

天文十二年七月、細川尹賢^{ただたか}の子次郎

目の芥川入城

氏綱^{うじつな}は細川高国(常桓)の跡目後継者であると主張し、和泉国武士玉井氏などのほか各地の

軍人衆を糾合して、和泉国堺南庄(現堺市内)に攻撃をかけた。これには河内畠山氏・紀州根来衆などの加勢もあり、和泉守護細川元常・守護代松浦肥前守らは苦境に立たされることとなった。そのような事態に対処するため、天文十二年七月二十一日、細川晴元は三たび芥川城に入った〔中世三五四〕。本願寺証如は早速八月二十四日、細川晴元芥川入城を祝って祝儀を贈っている〔中世三五五〕。和泉地方では、十月一日菱木合戦(現堺市内)、



写193 三好長慶軍中禁制(離宮八幡宮文書)

十二月十三日堺南口合戦などが戦われたが〔日根〕、畠山が戦線から離脱したため、大きな戦乱にならずに終り、晴元は病氣との理由から幕府への出仕が遅れていたが、天文十三年正月七日に出仕した。やはり芥川での新年ではなかったかと思われる。晴元が芥川城を離れたのは二月頃であったようである。

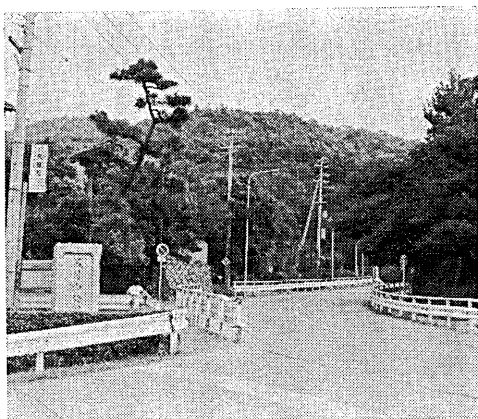
摂河泉地方での軍事的緊急状態が発生するたびに、管領であり細川氏の家督をつぐ細川晴元は芥川に出張して指揮に当った。いうまでもなくこれは芥川が軍事的要衝の地であったということである。また摂津国の武士が結束して晴元軍の中核的軍事力を構成している限り、晴元は政治的にも安泰であり、芥川城も直接兵火にさらされることなく、天下を睥睨（ひげい）することができたのである。しかしその摂津国内の武士の間に、次第に対立反目がうまれつつあった。

芥川城の攻防

細川晴元の腹臣で管領代官的地位にあった茨木長隆と、伊丹城主伊丹親興とが一つのグループをなして晴元側に立ち、これに対立する摂津国の武士三宅国盛・池田信正らが細川高国の跡目と称する氏綱および河内の遊佐長教と一グループとなってこれに対立するにいたった。そして天文十五年九月三宅・池田らは三好勢と衝突した。渡辺川で対峙し、九月十日には三好勢が池田城攻撃に向い、池田市場に放火、三好勢は優勢のうちに一応尼崎に引きあげた。

この時、細川晴元は芥川城に入城せず、摂津武士のなかで、ただ一人晴元に一味した伊丹親興のいる伊丹城に入った。晴元はその軍忠を賞して、入城した日の宵に親興を兵庫頭と名乗らせ、翌朝には大和守と号させて官位昇進の執奏をしたという〔中世三六一〕。

九月十八日には河内の遊佐長教に率いられた河内勢が芥川城を攻撃してきた。芥川城を守っていたのは葉

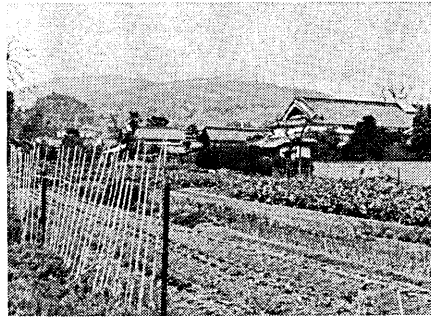


写194 池田城跡（池田市五月山）

師寺与一であろうが、これを支援するため三好政長（神五郎入道宗三）と丹波衆が後詰となった。合戦では河内衆は五〇名ばかりが敗死し、晴元軍側は侍分のもの約五〇〇、その他八〇〇名ばかりが死んだとも、丹波衆だけで二〇〇名余りが戦死したとも、あるいは丹波衆・三好政長軍側の戦死者七〇名あまりともいい、諸説があつていずれが正確であつたかきめ難いが、芥川城方の敗北であることはほぼ間違いない〔中世三六一・三六三・三六四・三六五〕。戦いは二日間を終り、三好政長・丹波衆そして遊佐長教に率いられた河内衆もそれぞれひきあげた。奈良の興福寺多聞院（たもんいん）の僧は、この芥川城の合戦が大合戦であり、両陣営にきわめて多数の戦死者がでたらしいと日記に書き留めている〔中世三六四・五参考〕。合戦

そのものは双方ともきわめて戦意にとぼしく、したがって戦闘のもっている真の政治的意義がつかめないままに参加したと判断できるが、噂は噂呼んで次第に誇大に伝えられていったものと思われる。その世情のなかに、大きな波乱が起るに違いないという不安が醸成されつつあったことを暗示している。

その不安とは何であつたろうか。畿内地方の数多くの武士は、幕府・管領・守護のもとにあって、次第に大きな実力をたくわえてきていた。すなわち一地域の武士団の棟梁（とうりやう）のようなものではなく、一国規模の全面的統治権、軍事権を掌握する戦国大名としての生長が日程にのぼってきた。しかし畿内地方の武士は横の連合



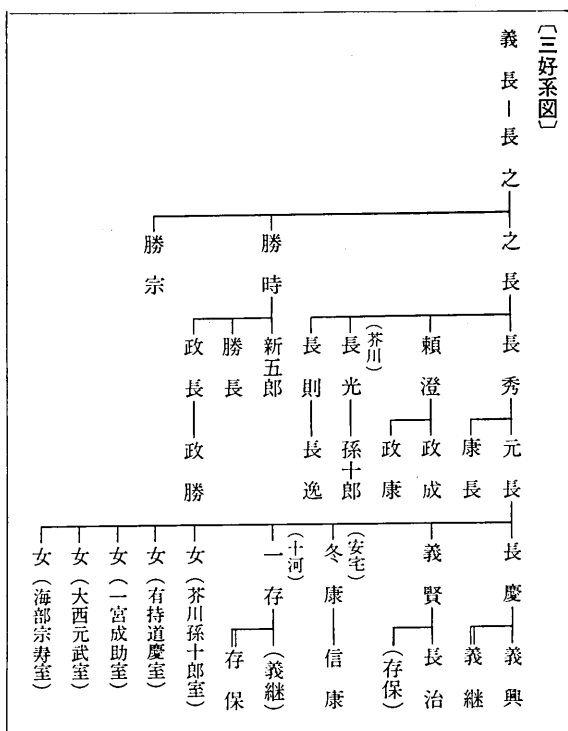
写195 安威旧村付近（茨木市安威）

をしたり、分裂対立することはあっても、その間に主従関係を形成して主君として君臨する権力をつくることは規制していた。そのようななかであって、戦国大名として新しく台頭する可能性があったのは、阿波国に強大な軍事力をもつ三好長慶であった。天文十五年の摂河泉地域の有力武士の分裂の激化は、そして反細川晴元Ⅱ茨木長隆勢の増加は、三好長慶が戦国大名としての地盤を築く絶好の条件であった。

天文十五年十月、四国からの三好支援軍が次々と堺に到着した。そして翌十六年二月頃から数万に及ぶ三好長慶・細川氏綱・遊佐長教の軍が摂津国内の細川晴元軍の拠点を攻撃しはじめた。芥川城への攻撃は五月五日からである。細川晴元も出陣してきたが、芥川城に入城して指揮をとったのではなく、城外の要地をしめ観戦する態のものではなかったかと思われる。戦いは激烈なものではなく、三好の全軍が周囲を遠巻きにして睨みあうという状況ではなかったかと思われる。約五〇日間、そのような状態が続いたのち天文十六年六月二十六日、芥川城主葉師寺与一は開城し、三好の軍門に降って、芥川の戦いは終わった。その開城にあたって、芥川城方は一人の人命をも損わなかったという。

この時の芥川城攻撃に加わったのは河内一国の衆のほか、摂津国内の武士としては三宅・入江・安威・茨木孫次郎・池田・原田・河原林・有馬そして三好長慶の縁者芥川孫十郎などがある。山城国乙訓郡に勢力を張る鶏冠井・物集女などもいた。また丹波国内藤備前守、播磨国衣笠兄弟衆、和泉国松浦肥前守、阿波・淡

開城された芥川城に、新しい城主として入ったのは三好長慶の縁者芥川孫十郎であった。それは芥川城が彼の本領であるという理由からであつたという〔中世三七一〕。「本領」とは、芥川孫十郎及びその祖先が、以前領知していたことがあつた由緒ある土地柄であるという



の四名は斬首されたのである。刑死の四人は、京都百万遍の僧の手によって千本に埋葬されたという〔三水記〕。いずれにしても芥川孫十郎が芥川を本領の地という理由はここにあった。

天文十八（一五四九）年六月、三好長慶は晴元方であった唯一の摂津武将伊丹親興の居城伊丹城を囲むとともに、晴元方についていた三好政長（宗三）を摂津国江口（現在の摂津市・大阪市東淀川区付近）で破って敗死させた。このようにして二十数年間続いた細川晴元政権も急速に瓦解していったのである。敏腕をふるった茨木長隆も政界から姿を消した〔今前掲書〕。

やはりこのような身近かな攻防は、現地の生活にさまざまな影響を与えずにはおかなかった。芥川城包囲にも参加したと思われる入江左衛門尉成重は、天文十七年十二月二十六日付の書状を、奈良二条院に送っている。それによると二条院から重宝の墨を贈ってもらった御礼と、供花代として二〇疋を送ったことを述べたあと、天河堤の修造が兵馬乱入によって工事が進捗せず、いまだ完成をみておらず、荘園の運営管理がまったく野放し状態になっているが、これは自分が意識的に放置していることによるのではないと弁解をしている〔保井芳太郎氏所蔵文書〕。当時、在地武士入江氏の指揮のもとで治水工事の一つとして天川（松尾川）の堤防が修造されているが、戦乱による中断で、未完成のまま放置されていることがわかる。もちろんその堤防修造の現場がどの辺であったか明らかではないが、天川周辺の村落生活や農業生産に大なり少なり損害を与えるものであったことは否定できない。また現地の武士でありながら、荘園支配のため奈良の荘園領主と交渉を保ち、治水工事に事実上かかずらわる必要があつて、戦乱そのものへの参加に限界をもたざるをえなかったことを示唆している。